

日本史 最後の審判 (仮タイトル)

登場人物

主・主人公。地獄で何年も弁護士をしている。

正確な年齢は不詳だが、見た目は中学生くらいの子。



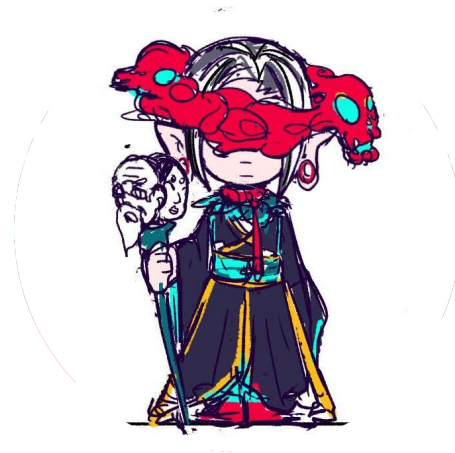
鏡・真実の鏡、主人公の相棒



天・最高神アマテラス、裁判長役



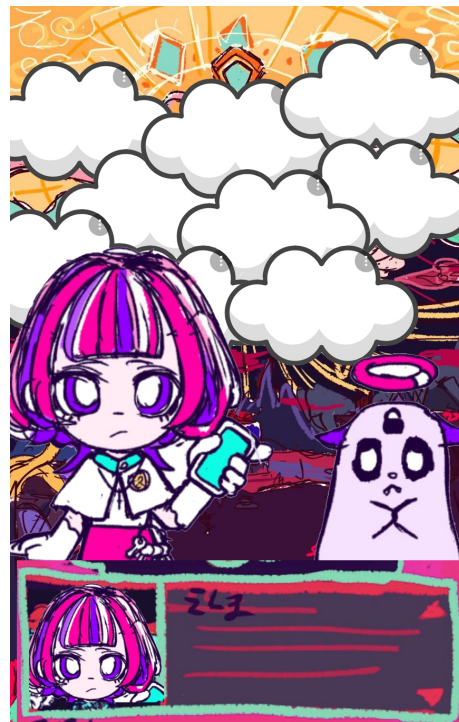
閻・閻魔王、検事役



鬼・地獄に住んでいる小鬼。



シーン冒頭



場所は地獄。裁判前の場面

主人公と、相棒・真実の鏡の話し合い

(極楽側の依頼を受けて、地獄に降りてきたところ)

自分たちが弁護士であるということ、

今回弁護するのが、蘇我馬子であること

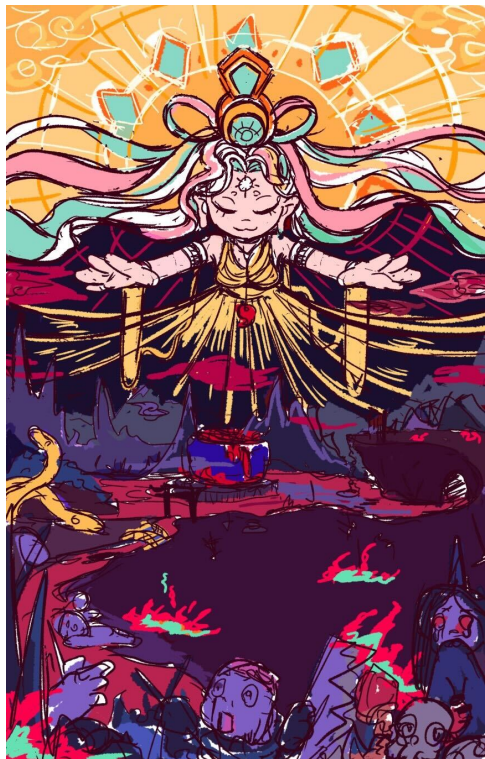
その被告は、「天皇殺し」という罪があり、

これからどうなるのか不安なこと、

などについて会話する

※最果ての壁からアマテラス登場

※アマテラスの前へ



アマテラスの前へ
裁判が始まる

最初に歴史裁判とは何かについて説明する

今現時点で考えている「歴史裁判」のルールは、

『歴史裁判における被告は、

権力を握る過程で必ず悪いことをしているので、

有罪であることは確定している。

(そのため被告は全員、死んでからずっと地獄で責苦を受けている)

重要なのは、その握った権力を使い、歴史に貢献しているかどうか。

そうであれば減刑をうけ、

地獄生活から抜け出し、

天国でボランティアに従事する生活に昇格できる。

貢献してなければ(私利私欲のためだけならば)、

永久地獄が確定する。

そのため、歴史裁判は、最後の審判とも呼ばれる。』

閻魔の冒頭陳述

裁判のルールを一通り説明後、
閻魔大王が、冒頭陳述で
「馬子の悪事」について述べる

今から千四百年ほど前。
奈良の都の出来事だ。

被告人の名前は
蘇我馬子（そがのうまこ）

馬子は政治上のライバルを
次々に殺害した。

さらには「絶対に殺してはならない人」
まで殺害した。

馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する
極悪人である。

※大体20〜30文字ほどの文章を4〜5セリフ
主人公は、このセリフに対して、「さらに聞きこむ」ボタン（仮）を押すと
より詳しい情報が手に入ったりする。
情報が入ったら情報ファイル（仮）を更新する
聞く順番は自由

今から千四百年ほど前。
奈良の都の出来事だ。

←

閻 「被告人が生きた時代は
西暦の〇〇年前後だ。
当時日本の中心だったのは
現在の奈良県だな。」

主 「そこで権力を握っていた人が
今回の被告人だね。」

被告人の名前は

蘇我馬子（そがのうまこ）

閻「当時たくさんいた有力者達の中で
最有力だった一族・蘇我氏のトップだ。」

馬子は政治上のライバルを
次々に殺害した。

閻「蘇我氏は有力な一族だったが
ライバルがいなかったわけじゃない。
だが邪魔者は次々に消されていった。」

主「馬子さんに殺された、ってことか。」

閻「最大の被害者は
物部守屋という有力者だ。
信心深い男だった。」

天「あら、神様を大事にする人は
好感を持てるわね。
たとえそれが私じゃない
神様でもね」

※人物ファイル

物部守屋取得

さらには「絶対に殺してはならない人」
まで殺害した。

主「馬子さんを弁護できるかどうか・・・
その最大の論点・・・。
それがここだよね。」

閻「馬子は当時の天皇を部下に命じて殺害した。」

人物ファイル

物部守屋



馬子のライバルで馬子に殺された。
信心深い人物だった。

その上、その部下も口封じで殺した。
長い日本の歴史の中で

天皇殺しをやった家臣は

馬子ただ一人だ!」

※人物ファイル??? 天皇取得

馬子は、邪魔者を殺し、政治を私物化する
極悪人である。

主「確かにそう言われても仕方ない。」

鏡「同僚を殺す、

上司は殺す、

部下も殺す。」

主「これは・・・凄まじいな・・・」

※全て聞き終わった時点で強制的に次へ

天「どうですか、主人公ちゃん。

繰り返しますが

これらの悪事は**事実**です。

弁護の余地などありません。

問題はその後・・・」

主「そうやってまで握った権力で

何か成し遂げたのか?」

天「その内容次第では

減刑の判決を下します。」

主「調査の時間をください。

必ず馬子さんを救って見せます。」

※調査モードへ

※メイン画面へ移動

※情報を集めるため、まずは馬子のところへ

人物ファイル

??? 天皇



馬子に殺された天皇がいるらしい。

※馬子をタップ

小鬼と被告がいる。

被告は、地獄の責め苦を受けている設定。

生前の悪事からイメージされた地獄を味わっている（オーダーメイド地獄）。
小鬼は、オーダーメイド地獄の下っ端雑用係。

被告・蘇我馬子が自分の事績を全てしゃべってしまったのは

裁判が成り立たないと考えたため、

地獄の責め苦を受けて意識混濁で直接話が聞けない状況にある、と設定。

プレイヤーは、被告のイラストで気になる部分をタップすると、
その部分に関して鬼が知っている情報を話してくれる。

だが小鬼は嘘ではないのだが、

閻魔が都合よく断片的に切り取った情報を鵜呑みにしている。

仕入れた情報は、情報ファイルに保存される。

まず小鬼との会話

オーダーメイド地獄の説明、自分の立場などを語る小鬼

その会話の後、被告の気になる部分をタップできるようになる。

好きな部分からタップ可能



※1について

主「骨が見えてゾンビ化してる・・・」

鬼「これは当時の『高貴な身分の人』の

お葬式に関係があるんだよ。

馬子さんってすごく**身分が高い人**を
殺してるよね？

えっと・・・誰だっけ？」

鏡「教えてあげないと、話が進まないね。」

※プレイヤーが、**天皇情報ファイル**選択

鬼「そうだったね。」

馬子さんは天皇暗殺後、

すぐに『土葬』、

つまり土に埋めて

埋葬しちゃってるんだよ。」

鏡「何か問題があるの？」

！火葬しなきゃいけなかったとか？」

鬼「当時は天皇が亡くなった時には

『もがり』をするのが普通なの。」

主「もがり？」

鬼「高貴な人が亡くなると、
すぐには埋葬しないのが
当時の常識だったんだ。
棺の中に放置して、
腐敗して白骨化するのを
見届けるんだよ。」

主「そ、それ自体が地獄の儀式なんだけど・・・」

鬼「当時はそれが偉い人に対する
正しい儀式方法だったんだよ。」

鏡「まあ時代が変われば常識も変わるから。」

鬼「馬子さんはその儀式をせずに
すぐに土葬しちゃったんだ。

このまま放置すると

恨みが元になってたたりをなす、
って考えたらしいよ。」

主「その報いとして

もがりされてるのか。」

馬子「う、痛い・・・」

鏡「やっぱり痛いんだね。」

鬼「まあ意識はつつすらあるからね。」

主「早く助けてあげたいね。」

鏡「ちなみに暗殺された天皇の
名前は思い出せない？」

鬼「思い出したよ。

崇峻（すしゅん）天皇だよ。」

主「ありがとうー!!」

人物ファイル

崇峻天皇



馬子に殺された天皇がいるらしい。

※情報ファイルのカード、書き換え



主「この仏像は何？」

鬼「信仰心が人だったみたいだからね。
地獄に落ちた時お守りとして
もらったみたい。」

鏡「あまり効果はないみたいだけど。」

鬼「心の支えにはなってるんじゃないかな。」



主「これは何かな？」

鬼「馬子さんが生前作った
法律に関係するらしいよ。」

鏡「つまり馬子さんの業績だね！
ぜひ教えて。」

鬼「・・・うーん。
かまわないけど・・・
本当に聞く？」

主「!？」

鬼「あまりイメージのいい法律じゃないな・・・」

鏡「聞くのが怖いけど・・・
ごんな内容？」

※選択肢提示

【身分制度を強化する法律】

【天皇に従えと書かれた法律】

【身分制度を強化する法律】

鬼「人を階級に分けて

支配するんだよ。

まず12種類の色の冠を

用意するの。

そして階級ごとにそれをかぶせる・・・」

主「それは・・・自分のテストの成績を

廊下どこるか、

頭に乗つけて歩くってこと？」

鏡「で、でも。

能力で人を選ぶのは

いいことじゃないかな。

公平だし。」

鬼「・・・馬子さんは

どの階級だと思っ？」

※プレイヤー選択

【一番上】

【一番下】

【実は知らない】

鬼「一番上だよ。」

鏡「馬子さん、優秀だね。」

鬼「違うよ。

馬子さんは冠を与える側。

だから無条件で一番上。」

主「・・・しょ、しょっけんらんよう・・・」

鬼「それ実際は、有力者の息子が

どうか、とかが関係してたらしい。」

主「立派なのは建前だけ・・・か。」

※情報ファイル更新

証言ファイル

??の法律



馬子関わった法律。
能力によって階級を分けるらしい。
馬子は階級を与える側。

【天皇に従えと書かれた法律】

鬼「閻魔様が持ってた」ピーを
読んだことがあるよ。」

鏡「内容は？」

アマテラス様が感心するような
立派な内容？」

鬼「うーん。どうかなあ。

天皇に従え、ってかいてあったな。

あとは・・・そうそう・・・

お役人は朝早く出てきて

しっかり働け、だって。

夕方遅くまで帰るなって書いてあった。」

主「人々を社畜にしようとする気が

垣間見える・・・」

鬼「お説教が、17個もあったらしいよ。」

鬼「ちなみに当時の天皇は、

馬子さんの身内なんだよね・・・」

鏡「天皇に従えってことは、そのバックにいる
自分に従えってことか・・・」

※情報ファイル更新

証言ファイル

???の法律



馬子関わった法律。
天皇に従えと書いてあるらしい。
しかし天皇の後ろにいるのは馬子。

※4にっついて



鏡「今日もお願いしますね。
祟り神の皆さん。」

※蠢く怨霊

鬼「ごっちゃって24時間体制で、
馬子さんに不安と悪寒を
与え続けてるよ。」

主「いっばいっついてるね。」

鏡「たくさん殺したみたいだからね・・・」

※全て読むと強制的に次へ

鬼「弁護士さんは、馬子さんの弁護を引き受けるんでしょう？
でも・・・正直やめた方がいいと思うよ。
馬子さんは国内の政治でもこんな感じだけど、
それ以外もあまりよくないって聞いているから・・・」

主「それ以外って？」

鬼「・・・いや、なんでもない・・・
とにかく頑張ってるね。」

主「左上にいるね。」

鏡「馬子さんの横に線が伸びてるね。
この場合はどんな関係を
表してるんだろう。」

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「馬子さんから線が横に伸びて

馬子さんのお姉さんが書かれている。
ということは兄弟または姉妹だね。」

鏡「枠の色はどんな意味が？」

※青は???

赤は???

黄色は???

選択肢【男性 女性 天皇】

鏡「黄枠の上の数字は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 即位した年
- 2 死んだ年
- 3 何代目の天皇か

3が正解

鏡「欽明天皇と馬子さんのお姉さんの間に
赤い線が引いてあるけど。
この関係は・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 親子

- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「赤い線で結ばれているのは
夫婦だろうね。」

鏡「じゃあ縦方向に書かれている
線は？」

※プレイヤーの選択

- 1 親子
- 2 兄弟・姉妹
- 3 夫婦

主「これは親子、かな。」

それ以外にもお互いの関係が
書いてある部分【敵対・支援】もあるね。」

鏡「これが家系図の基本的な見方だね。」

主「・・・」

鏡「どうしたの？」

主「ちょっと気になるんだけど・・・
このどこかに馬子さんが殺した
崇峻天皇が入るんだよね？」

鏡「まあそうだね。」

主「天皇の枠は2つ空いてるけど・・・
一人とも馬子さんの親戚じゃないかな？」

鏡「二人とも馬子さんのお姉さんの子供、だね。
ということとは馬子さんから見ると・・・」

※プレイヤーの選択

- 1 うつり
- 2 孫
- 3 おい・めい

主「自分の兄弟の子供は、

男の子ならおい、

女の子ならめいだね。

馬子さんは、天皇殺しだけじゃなくて
身内殺し、なんだね。」

鏡「とにかく家系図を完成させよう。」

※プレイヤーの選択

右下の候補から

プレイヤーに選択させる。

選ぶ順番は自由

崇峻天皇を選択した場合

主「天皇枠は二つ。

でもどちらに入るのか
情報が全くないよ。」

鏡「でも崇峻天皇は

馬子さんに殺されてるんだよね。

と、いうことは？」

※プレイヤーが選択

・右の枠に入れる

・左の枠に入れる

・保留にしよう

プレイヤーが右の黄枠を選んだ場合

主「左の枠は、馬子さんが支援してるもんね。」

鏡「となると消去法で右側だね。」

※右の黄枠に、崇峻天皇入る

自動的にもう一つは推古天皇

プレイヤーが左の黄枠を選んだ場合
鏡「馬子さんから支援を受けてるけど・・・
本当にここで大丈夫？」

選択肢

【変える】を選択

主「確かにおかしいね。

逆だったかもしれない。」

【変えない】

主「なんとなく直感でそう思う。

理由があるとしたら・・・。」

選択肢

【穴穂部皇子が気になる】

【馬子の姉が気になる】

【とにかく直感】

【穴穂部皇子が気になる】が正解

主「穴穂部皇子って人が気になるんだよね。

この人は、馬子さんと敵対している人に

支援されてるよね？

つまり馬子さんからすると・・・。」

穴穂部皇子が「①」になったらまずいので
違う「②」を支援した。

選択肢「兄弟 夫婦 天皇 ライバル」

① 天皇

② 兄弟

鏡「なるほど。

可能性はあるね。」

※左の黄枠に、崇峻天皇入る
自動的にもう一つは推古天皇

[推古天皇を選択した場合](#)

鏡「この人誰だろ？」

名前が出てきてないよね？

後回しだね。」

聖徳太子を選択した場合

鏡「この人について今のところ情報がない。

でも『太子』だよね。

太子って『皇太子』とかの太子だよね？」

主「太子って・・・」

1 天皇を補佐する人

2 天皇を継ぐ人

3 天皇の先生

主「皇太子って天皇のあとを

つぐ人のことだよね？」

『○○天皇』じゃなくて

太子と書かれている、ってことは

天皇になる前に

死んじゃったんだろうね。」

鏡「太子になれるってことは

天皇の一族だったはず・・・

可能性がある枠は・・・」

※プレイヤー選択

一番下の青枠に聖徳太子を入れる

物部守屋をタップした場合

主「この人はたしか

馬子さんのライバルで

殺されたんだよね？」

その理由はわからないけど。」

鏡「ということは物部守屋の場所は・・・」

※プレイヤーが左下の青枠を選択

※粹を全てつめると強制的に進展

主「身内の天皇を殺した男馬子か・・・」

鏡「昔は家族で殺し合うのは珍しくなかったけど。
印象は悪いね。」

主「もう一つデータがあったよね？」

「それもチェックしよう。」

※強制的に年表に遷移

馬子の業績を探して、年表の調査開始
年表の項目をタップすると
会話が始まる

581 隋(国名)が約300年ぶりに天下統一

587 蘇我馬子が物部氏を滅ぼす

592 蘇我馬子が崇峻天皇を暗殺

593 推古天皇即位

聖徳太子が摂政(補佐役)となる

600 隋へ使者を送る？

(日本側には記録なし、中国側には記録あり)

603 冠位十二階を制定

604 十七条の憲法を制定

607 隋へ使者を送る

626 蘇我馬子死去

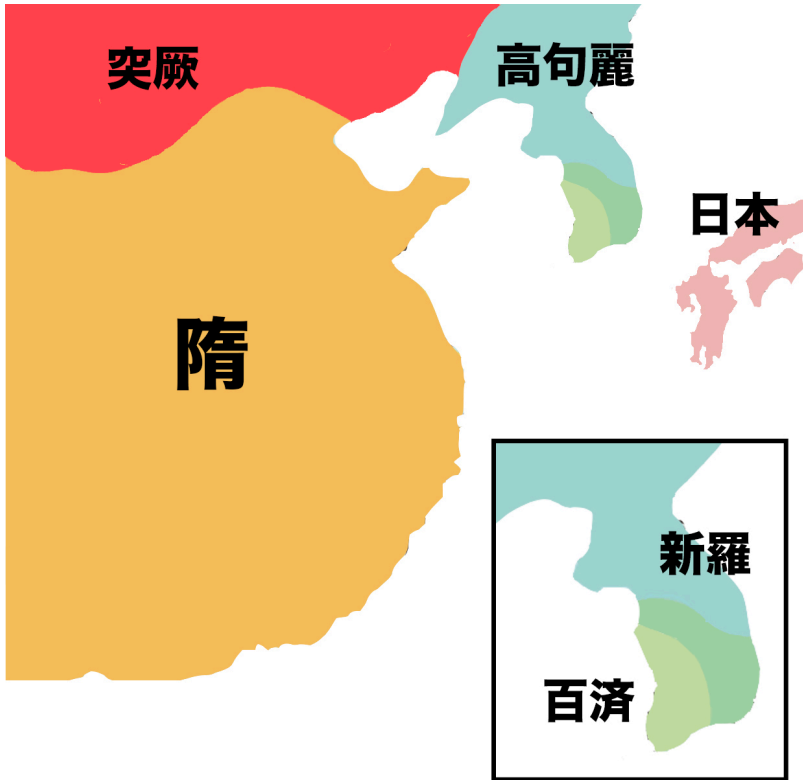
●581年

主「日本の年表だよな？」

なんで中国の情報があるの？」

鏡「隋ってどこ？」

主「地図がついてるよー！」



鏡「ここが隋、か。」

今の国名で言つと・・・」

【韓国】

【中国】

【北朝鮮】

主「隋は昔の中国なんだね。」

主「日本の年表なのに

どうして中国のことが？」

鏡「中国は当時の先進国だからね。」

それが300年ぶりに統一されたんだから

大ニュースなんですよ。」

日本にも影響があったはずだよ。」

主「どんな影響？」

鏡「それをこれから二人で考えるんでしょう？」

※情報ファイル更新

[証言ファイル【隋】追加](#)

●587年

主「馬子さんの悪事の一つだね。」

鏡「どうして物部さんと争ったのか・・・

原因は現時点で不明・・・だね。」

主「理由なんかあったのかな？」

ただ一番になりたかった
だけじゃないかな。」

鏡「自分の権力のためだとしたら・・・。

より悪質だね。」

●592年

主「本当にとんでもないことしてくれたよ、この人は。」

鏡「暗殺の原因も今の所不明だね。」

●593年

主「推古天皇が即位したのは

崇峻天皇が暗殺されたから、
なんだね。」

鏡「推古天皇も自分の身内だから

即位しても問題なかったんだね。」

※家系図で推古と崇峻の位置を間違えてくれた場合

主「(あれ!?)

だとするとさっきの家系図

おかしくないかな？

あとでチェックしよう)」

●600年

主「これってどついう意味？」

鏡「そのままじゃないかな？」

日本が中国の隋へ使者を送ったけど、

中国はそのことを記録したけど、

日本はしなかった・・・」

主「なんで？」

自分で送ったんでしょ？」

鏡「記録ミス？」

もしくは都合の悪事でも

あったのかな。」

主「これは馬子さんとは関係があるのかな。」

鏡「当時の日本を仕切ってたのは馬子さんだからね。

使者を送るのにも

関係してたんじゃないかな。」

※情報ファイル更新

証言ファイル【隋への使者】追加

「隋へ使者を送っているらしい」

●603年冠位十二階を制定

鏡「なんだろう、これ。」

冠？位？」

主「ひょっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択

主「名前が分かっただけでも前進かな。」

●604年十七条の憲法を制定

鏡「なんだろう、これ。」

主「ひょっとしてこれのことかな？」

※証言カードの中から特定のカードを選択

●607年

主「また使者を送ってる。」

鏡「600年に送った時は日本側は

それを記録しなかった。

でも今回はそんな注意書きはない。

特に意味はないのか？」

●626年

主「馬子さん、死んでる・・・」

鏡「この年表で確認できる馬子さんが

関係していそうな業績は、」

600 隋に使者を送る

603 冠位十二階制定

604 十七条の憲法

607 隋に派遣

くらいかな。

主「問題は、これらのことが

日本の歴史に貢献したかどうか、だね。」

※崇峻天皇と推古天皇が逆の場合、一度家系図へ

鏡「ひとまず家系図に戻って

うめられる部分を

完成させよう。」

※家系図へ戻る

※推古・崇峻を正しい位置へ

主「でもわからないな。

この家系図で見ると

馬子さんは崇峻天皇を

支援してた、って

書いてあるよ。」

鏡「・・・何かの情報が間違っているのか・・・」

※小鬼再度登場

鬼「調子はどつ?」

主「そういえば、さっき『国の中の政治』もよくなかった、
って言ったよね。」

ひょっとして小鬼ちゃんは、
このことを知ってるんじゃないの?」

※情報ファイルから、「隋への使者」のカードを提示

鬼「う、うん。」

閻魔様はあまりいいこと言ってなかったな。
まず最初に中国に使者を送ったの・・・。」

主「きつとこれだな。」

※プレイヤー、年表で600年を選択

鬼「でも・・・
日本の政治が幼稚で意味不明だって
馬鹿にされたらしいよ。
恥だから、記録にも残せなかったらしいの。」

鏡「年表の通りだね。」

鬼「数年後また送ったらしいの。
けど今度は、持って行った手紙が
物凄く無礼だったらしくて
相手を怒らせちゃったんだって。
ここに訳された書き写しがあるよ。」

【日が昇るところの天子から
日が沈むところの天子に
お手紙を送ります】

主「天子って?」

鬼「『天命を受けて国を治める者』って意味だよ。
天皇とか皇帝の別名で使われてたんだよ。」

主「2回目も失敗か・・・

でも年表には記録なし、

とはなつてなかったね。

どうしてだろっ?」

鬼「さあそれはわからないけど。

とにかく外交音痴だった可能性は高いね。」

主「ありがとう。助かったよ。」

※情報ファイル更新

証言ファイル【隋への使者】更新

※小鬼去る

主「集められる情報はこれだけかな。

正直、馬子さんに関する前向きな情報は

あまりなかったね・・・」

鏡「作った制度は、自分の権力のため、

って感じが濃厚だし・・・」

主「それどころか、外交音痴の可能性すらある・・・」

鏡「でもやってみるしかないね。」

※馬子と、物部や天皇のものと思われる怨霊に向かって

主「頑張ってみるね馬子さん。

崇峻天皇や物部さんの怨霊も

あんまり馬子さんをいじめないでよ!」

.....

鏡「・・・無視だよ。

寝てるのかな?」

主「でも24時間無休怨霊システムだつて言ってたのに。

とにかく勝負するしかないよ!」

裁判では、検察側、弁護側、それぞれ一人ずつ
証人を呼ぶことができます。

アマテラスのところへ。

主「弁護人、準備は完了しました。」

※裁判再開

裁判では、弁護側、検察側共に

証人として魂を一人ずつ召喚できる。

検察側は、物部守屋を召喚。

守屋は、馬子の悪口を言いまくる。

その悪口の中に、

「仏像を拝んでいる愚か者」と言う発言が入る。

天「ところで閻魔ちゃん。

馬子ちゃんはどうして

『天皇殺し』をしたのかしら。」

閻「順序を追って説明いたしましょう。

馬子がどれだけ身勝手なのか・

お分かりいただけると思います。」

閻「まず家系図をご覧ください。」

閻「3代用明天皇が崩御した時

後継者争いが起きました。

後継者候補に上がったのは

この二人でした。」

※家系図の穴穂部と崇峻部分、点滅

閻「物部氏は穴穗部皇子と

繋がりが強く、

彼を支援しました。

それを気に食わない馬子は

崇峻天皇を支援したのです。

結局物部も穴穗部皇子も

馬子に殺されます。

そんな経緯で

崇峻天皇は即位したのです。」

天「わからないわね。

じゃあ二人は仲良しさん

だったんじゃないの？」

閻「馬子の残虐性を

軽く見てはいけません。

崇峻天皇は

馬子の言いなりでした。

そんな時に事件は起こります。

崇峻天皇に猪が献上されました。

日頃から不満が溜まっていた天皇は

『猪の首を切るみたいにな、

あの憎い奴の首も切りたい』と

こぼしてしまつたのです。

それを聞いた馬子は

俺のことだ、と怒り

崇峻天皇を殺害したのです。」

主「また不利な証言が・・・

馬子さん、とんでもないな。」

天「閻魔ちゃんの主張はわかりました。

馬子ちゃんの犯行は

極めて身勝手で残酷であると

言わざるをえません。

馬子ちゃんが地獄に落ちて

責め苦を受けていたのは

妥当な処罰だったと

言えるでしょう。」

さて弁護士ちゃん。」

主「はい。アマテラス様。」

天「ここからが本当の歴史裁判です。

そこまでして奪った権力。

馬子ちゃんはそれで

何か歴史に貢献したのでしょうか。」

閻「では本題に入りましょう。

すなわち、馬子に功績なし、

ということを確認して見せます。

年表をご覧ください、アマテラス様」

天「鍵になるのは、

592年の天皇暗殺から

626年の馬子ちゃん死亡、

までの出来事ね。」

閻「おっしゃる通りです。

私が主張するのは

603年 冠位十二階

604年 十七条の憲法

です。」

天「どんな制度なの？」

閻「とんでもない『身分制度』です。

まずは冠位十二階から

解説いたします。」

閻魔・冠位十二階について発言

差別的な身分制度です。

人々を階級で分けるのです。

そして階級ごとに色の違う

主「!?!」

閻「馬子は階級を授ける側です。

馬子の影響がないはずがない。」

天「確かにそうね。」

閻「さらに十七条の憲法について

解説いたします。」

閻魔・十七条の憲法について

この憲法は現在の憲法とは
全く違います。

今の憲法は人々は平等だと
書いてあります。

しかしこの憲法は真逆。

馬子の命令は絶対である、
と書いてあるのです。

鏡「また嘘が混じっているね。」

馬子の命令は絶対である、
と書いてあるのです。

の部分に証言カード「十七条の憲法」を提示

主「正確ではない情報が

混じっていますよ。

天皇に従え、と

書いてあったはずですよ。」

閻「これは失礼。

しかしその違いは大した違いではありません。

天皇は馬子のめい・推古天皇です。

推古天皇に従えというのは、

自分に従えということです。

結局、自分の権力強化のための

道具にすぎません。」

天「なるほど。」

弁護士に反論はありますか？

主「え・・・えっと・・・」

鏡「どうしよう・・・」

やっぱり調査で集めた情報通りだ。」

天「どうやら無いようですね。」

主「ちょ、ちょっと待ってください。」

天「!？」

主「まだ、議論する余地は・・・
残っています・・・多分。」

鏡「とにかくしつこく食いついて行かないと。」

天「それは一体なんですか？」

主「私たちは今、
『国の中の政治』に関して
評価しました。
でも『国の外に対する政治』の
評価がされていません。」

天「つまりあなたは
何について言っているのですか。」

※「隋への使者」カードを提示

天「外交における功績ことですね？」

主「そ、そうです。」

天「閻魔ちゃん、どう思いますか？」

閻「私がかまいませんよ。
損をするのは
弁護士側であることに
変わりはありません。」

閻魔・遣隋使について

当時の中国は、大国・隋でした。

先進国・隋と国交を

結ぼうとしたのはいいのですが、

馬子は、『日が昇る場所の天子から

日が沈む場所の天子に』

などと手紙を

書いたのです。

隋の皇帝は当然怒り、

危うく日本は攻められるところでした。

これが900年の失敗外交です。

記録に残せなくて当然ですなあ。

鏡「・・・あれ？

集めた情報と違う食い違う部分がある・・・」

※

これが900年の失敗外交です。

記録に残せなくて当然ですなあ。

「隋への使者」カードを提示。

主「閻魔大王。

また情報が間違っていますよ。

『日が昇る沈む問題』は

607年の外交の時です。」

閻「そ、そうだったかな・・・」

天「でも弁護士ちゃん。

じゃあ900年の記録は

なぜないの?」

主「それは決まっていますよ。」

900年は違う失敗をしたからですよ。
だから書けなかったんです・・・

あれ?」

鏡「・・・。」

じゃあどうして大王はそれを
言わなかったんだろう。」

主「馬子さんは隋との外交で

多分2回失敗をしている。

それをわざわざ一つにまとめて

証言をした・・・。」

鏡「その理由は?」

※900年の失敗外交に何かあると考え、
事情を知っている当時の隋の皇帝に
話を聞こうと考える弁護側

主「900年の外交は失敗だったけど、

閻魔大王にとって何か知られなくない

要素があるんだよ。

アマテラス様。

弁護側は被告を弁護するために

ひとりの魂を召喚したいと考えます。」

天「それは誰ですか?」

主「それは・・・900年の隋の皇帝です。」

天「・・・弁護側が招く魂は

馬子ちゃんを弁護してくれそうな人が

良いと思うのですが。」

主「かまいません。

日本側の、つまり馬子さんからの使者を

馬鹿にした皇帝を呼ぶことを許可してください。」

天「まあ、私がかまいませんよ。」

※鏡、隋の皇帝を招魂

主「隋の皇帝陛下ですな？」

あなたはなぜ

日本の使者を馬鹿にしたのですか？

それを証言してください。」

隋の皇帝による発言

お前の国の政治は

どんな制度だと聞いたのじゃ。

【天を兄として、日を弟としている
などと意味不明な回答をしてきた。

我が隋は、わしの命令一つで

大陸を貫くような大きな工事ができるほど
まとまった政治をしておった。

科挙(かきよ)すらやっていたのだ。

馬鹿にもするじゃろ。

天「時間がないから

質問は一つだけにしてね。

中国の神様に怒られちゃうわ。」

※科挙(かきよ)までも行なっていたのだ。
にしたいして質問。

主「その『かきよ』とはなんですか？」

皇帝「知らんのか？」

役人を試験で採用する制度じゃよ。

わしも死んでから知っただんじやが、

当時そんなことをしている国は

なかったらしいぞ。

豪族が世襲するのが普通じゃからな。
お前の国もそうじゃった。」

主「も、もう一つだけー」

607年にも使者が来たことを
あなたは知っていますか？」

皇帝「こりずにまた来たのか？」

知らんよ。

わしは604年に死んだからな。」

主「あ、ありがとうございますー！」

※皇帝、消える

主「(よしー多分つながったー)」

天「あんまり弁護にならなかったわね。」

主「いいえ。そんなことはありません。
情報をまとめてみよう。

皇帝の発言の中でこれとこれに
注目しよう。」

①我が隋は、わしの命令一つで
大陸を貫くような大きな工事ができるほど
まとまった政治をしておった。

②科挙(かきよ)すらやっていたのだ。

この2つの発言と関係がありそうな証言を
選んでみよう。

※①には十七条の憲法

主「隋の皇帝はすごい権力を持った
独裁者だったんでしょっね。

でもだからこそ大きな事業ができた。」

※情報ファイル十七条の憲法書き換え

②には冠位十二階のファイル

主「当時は、世襲が当たり前だった。

今では能力主義は珍しくないけど

当時は画期的だったんだよ。」

※情報ファイル冠位十二階書き換え

主「アマテラス様。

もう一度内政について

訂正があります。」

鏡「ここは重要だよ。」

【十七条の憲法と冠位十二階は

国外からの視点を加えると

価値がわかってきます。

超大国・隋は、

能力主義と権力の集中を

取り入れた国家でした。

冠位十二階と十七条の憲法は

日本なりにこの2つを模倣した結果なのです。】

※この文章に空欄を設け、選択肢を用意し、
プレイヤーに選択させる

主「900年の外交は記録に残せない程の失敗でした。

しかし馬子さんや推古天皇・聖徳太子達、

つまり当時のリーダー達は放置しませんでした。

そこで制定されたのが

2つの法律です。

冠位十二階と十七条の憲法についての

閻魔大王の主張は、

物事の一部分しか見ていない

と言っているでしょう。

閻魔大王が外交に関して嘘をついたのは

『成功の元になった失敗外交』を

隠すためでしょう。」

閻「だが！

607年の外交はどうだ！

とんでもない手紙を持参し

危うく国を滅ぼしかけたのだぞ！」

主「……果たしてそうでしょうか。」

閻「……どういことだっ。」

主「馬子さんは、

隋が日本を攻められないことを知っていたのでは？」

※プレイヤーが選択

隋は当時、北方の高句麗に遠征しておりその遠征もうまくいってなかった。

そのことを年表か（高句麗遠征という項目を追加しておく）地図（中国と高句麗が敵対していたことを矢印などで表現）で前もって出しておく。

「すでに高句麗と戦っているから、これ以上敵は増やせなかった」と予想させ、地図、または年表を選択させる。ちなみに、馬子は当時大陸の事情に精通していたという説がある。このことも事前にどこかで書いておきたい。

主「馬子さんは大陸の事情に

精通していた政治家でした。

大陸の状況を知っていたのでしよう。

今なら強気な態度で行っても攻めてくるできないと計算していたのです。」

閻「と、とにかく！」

馬子は、残酷な犯罪者だ！

天皇・物部殺害事件で

それは明らかだ。」

天「閻魔ちゃん、それは違うんじゃないかしら。

その罪は消せないけれど、

それに見合う功績があるかどうかを

問うのが歴史裁判です。」

閻「ぐっ・・・」

主「アマテラス様のいう通り。」

ただ・・・

物部氏殺害に関しても

弁護することはできませんー」

鏡「そうなの？」

主「やっとわかったんだよ。」

違和感の正体が。」

※物部守屋を召喚した時の発言内容に

主人公は、何か違和感を感じるが

正体がわからない、と発言させておく。

違和感の正体は、

最初閻魔は、物部守屋を信心深いと紹介したのに

守屋は、仏像を拜む馬子を馬鹿にしたこと。

最高神アマテラスの気を引くため嘘をついたのか

何か理由があるのか迷う。

馬子と守屋は二人とも信心深い、

信じているのは、守屋は日本古来の神様、

馬子は当時大陸で巻き起こった仏教の神様だった。

対立の原因は、単なる権力争いではなく、

当時の最先端の文化である仏教を取り入れ、

日本の文化度を上げようとした馬子と、

古来の神々を守るうとする守屋の争いだった。

(ちなみに物部氏の祖先は日本の古い神様であり

物部氏は祭祀を担当する豪族だった)

そのため、守屋との争いも擁護できると主張。

馬子を呪っていた霊も、物部氏や天皇の霊ではなく、

隅に追いやられた日本古来の神々の怨霊だった。

裁判に入る前に、守屋や天皇の霊だと思いきりかけても

返事をしなかったのはそのためであることにも行き着く。

天「弁護側の主張はわかりました。

馬子ちゃんの行動に

身勝手なところがないとは
言いません。

ただ、歴史において

非常に画期的な政治を

したことも事実であると

考えます。

減刑とします。

馬子ちゃんは仏教に熱心だったようですから
極楽の文化財の管理員を命じます。」